

## 発掘速報展平城 2001「奈良の都を掘る」

平城宮発掘調査部が実施した発掘調査のうち、2000年度の成果を主体として、一部2001年度の成果も含めて速報展示したものです。11月13日～25日まで、平城宮跡資料館で実施しました。

展示は、遺跡展示と遺物展示に分かれます。遺跡展示は、平城宮では、第一次大極殿地区（315・316次）、平城京内では、左京三条一坊（314-17次）興福寺中金堂・回廊（325次）興福寺一乗院（317・321次）興福寺大乘院（317・321次）西隆寺（320・324次）です。発掘遺構の写真パネル、実測図、復原図などにより、わかりやすい展示をめざしました。

遺物展示は、第一次大極殿地区（315・316次）出土の木簡、一乗院（317・321次）出土の土器、瓦、銅工房関係遺物を展示しました。



速報展の観覧風景

とくに、生の木簡の展示は好評で、「難波津の歌」の一節を記した木簡はとりわけ人気を集め、くいいるように眺める姿が見られました。

木簡の展示にあたっては、期間の前半と後半で木簡を入れ替え、毎朝、夕に保存液の点検をおこないました。また、展示ケースには、紫外線測定器を設置し、展示環境のデータ採取に努めるなど、保存に万全を期しました。

この展示では、同時に「天平の貴族」と題して、奈良時代のファッションを復元した人形4体を展示しました。華麗な天平の衣装は、リアルな人形とあいまって、観覧者の目を楽しませました。これは、1988年に制作したもので、今回が、研究所での初披露となりました。

今回の展示に際しては、平城宮跡発掘調査部、埋蔵文化財センターの多大な協力を得ました。このような展示は、研究所が実施している種々の発掘調査の成果をまとめてご覧いただける機会ですので、今後とも続けていく予定です。（文化財情報課）

## 発掘調査の概要

### 旧大乘院庭園の調査（平城第336次）

大乘院は、かつて南都随一の名園と讃えられた庭園です。財団法人日本ナショナルトラストによる保存修理事業に伴う調査として、奈良文化財研究所では1995年から国指定名勝旧大乘院庭園の発掘調査をおこなっています。

大乘院は一乗院とならぶ興福寺の門跡寺院であり、一乗院から遅れること約100年後の11世紀半ばに創立されました。大乘院門跡は有力貴族の子弟を迎え、平安、鎌倉、室町、江戸時代を通じ、社会的、経済的に強大な権力を誇り、その庭園は各時期を通じ、名高い庭園であったことが、文献資料などから



現地説明会風景

読みとれます。

今年度の調査区は西小池の推定位置にあたります。江戸時代末に描かれた『大乘院四季真景図』には西小池が描かれていますが、現在では埋没してしまっています。今回の調査では、西小池の北部分が姿を現しました。

調査区北側では、昨年度の調査でも検出された漆喰池の続きや階段状石組、石組溝などが検出されました。また、池の北側には、それらから流れこむ水を浄化するための浄水施設があり、絵図からは読みとれない池の細部が、今回の調査で明らかになりました。

12月8日には、一般の方々にむけた現地説明会を開き、約180人の方々にご参加いただきました。調査は12月末までの予定で、断ち割り調査を通して、西小池の造成時期などに関する解明を目指します。

### 平城宮第一次大極殿院西樓の調査（平城第337次）

平城宮跡では本年度、第一次大極殿復原事業が起

工されました。大極殿は四周に回廊を巡らせていて、これに囲まれた部分を大極殿院と呼んでいます。今次調査は、大極殿院復原事業の事前調査です。調査地は大極殿院の南端、南面回廊の中央に開く大極殿院閤門こくもんの西側です。調査面積は1260㎡。

調査地から閤門を挟んだ対称の位置では、1972年に発掘調査が行なわれ、南面回廊の北半部に食い込むような建物があったことがわかりました。このとき掘り上げられたのが、平城宮跡遺構展示館に「平城宮最大の柱」として展示されている掘立柱ほりたての柱根です。その大きさから、この建物は高い柱をもつ楼閣建築であったと推定され、「東楼」と呼んでいます。



発掘現場

発掘調査は、東楼と対称の位置に西楼にしろうはあるか、西楼の規模と構造は東楼と同じか、をテーマとしました。10月11日、まず調査区西半から着手。確認できた遺構は、西楼取り壊し後に敷き詰められた小石層、西楼の掘立柱抜き取り痕跡と礎石の据え付け痕跡、回廊礎石の据え付け痕跡、大極殿院内庭に敷かれた小砂利など。それらはまさに東楼を折り返した位置に現れました。

今季の調査は東半の小石層を確認して、しばしお休み。東半の遺構確認や柱穴の掘り下げは来年度実施する予定です。はたして「最大の柱」を上回る巨大柱根は眠っているのか。（平城宮跡発掘調査部）

#### 藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

秋の現場班は、10月から大極殿院東回廊部分の調査を開始しました。大極殿東方に建つ東殿を対象とした北区（約1200㎡）と、回廊およびその東側に建つ大型建物西端の確認を目的とした南区（約500㎡）に分けて調査しています。

この一帯は、約60年前に日本古文化研究所が壺掘り調査をおこない、遺構の概略が判明しています。

今回はそこを面的に調査し、回廊と東殿の細部構造を明確にすることが目的です。12月現在、南区についての調査が進行中です。

まず南区の東端では、1999年度の調査で確認した東西棟大型礎石建物の西妻を検出しました。これによって、桁行9間、梁行4間の規模をもつことが確定し、藤原宮では大極殿に次ぐ大規模な建物であることがわかりました。

また、大極殿を取り囲む回廊は、幅6mの複廊であることを確認しました。2カ所に礎石が残りますが、他の礎石は後世に抜き取られています。この周辺には、大量の瓦が堆積していました。

なお、11月初旬には、カンボディアからの研修生



回廊周辺瓦堆積の調査風景

3名を迎え、国際色豊かな現場となりました。調査は3月までの予定で、これから北区（東殿）の本格的な調査に入ります。

#### 石神遺跡の調査（飛鳥藤原第116次）

石神遺跡は、斉明朝（655～661年）のころに異国や辺境の民への饗宴をおこなったり、客館として機能した場所と考えられています。現在、飛鳥資料館に展示している石人像と須弥山石は、明治時代はこの遺跡から掘り出されたものです。

調査は7月からはじまり、およそ5カ月かかってようやく終了しました。発掘した面積は約500㎡ですが、遺構が複雑に重なりあっているため、ひじょうに手間がかかります。

今回の調査では、斉明朝の石神遺跡の北を区画する施設がみつかりました。調査区を横断する東西の掘立柱塀と、それに並行する石組みの水路です。また、この水路とT字形に接続する南北の水路も2条あり、いずれも石で護岸されています。さらに、いくつかの掘立柱建物のほか、時期の違う遺構も確認しています。